

【巻頭言】

ホンモノを探し続けて — KHAN20年と私

経済学研究科 教授
玉岡 雅之

ある日、学部のゼミナールで次のようなやり取りがありました。

「この内容、どうして調べてきたの？」

「ネットで調べたら、一番トップに載っていました。」

「そうなんだ。でもトップに載っていたからって、そこに書いてあることが本当かどうかは分からないよ。」

「分かりました。でも本や論文などきちんと活字になっているものを書いてあることは正しいんですか？そこに書いてあることが正しいかどうかはどうやって調べるんですか？」

「いい質問だ。」

今からちょうど 20 年前に World Wide Web コンソーシアムが MIT で立ち上げられました。今現在皆さんが日々ご覧になっている「ホームページ」の始まりで、瞬間に世界中を席捲していき、日本でも阪神淡路大震災を機に普及していきました。神戸大学でも同時期にインターネット接続が KHAN(Kobe Hyper Academic Network)という名前で行われ、学内のネットワーク整備が行われました。今読んでおられる MAGE の 1994 年から 1997 年にかけてのバックナンバーをご覧いただくと当時の様子が分かると思います。

インターネット(以下、「ネット」と省略することあり)の黎明期には参加者みんなが情報の発信者になるべく今から見れば拙い技術で自分自身を世界に飛び出させていきましたが、商用で利用されるようになってから、段々と情報の洪水にさらされるようになり、もっぱら受け手の立場でネットを利用していくことになり、情報の取捨選択の「技術」がだんだんと問われるようになっていきました。

この 20 年でネットを取り巻く環境が変わったことといえば、セキュリティの問題が最大の難問になり、神戸大学でも教育システムがこの理由により大幅に変わることになりました。またネットを利用した犯罪や SNS を使った個人情報の開示による事件など、生活が便利になった反面、やはりネットは怖いなどという「思い込み」が広まっているのも事実です。ネットに固有の問題がないわけではないですが、そのような問題を起こす人格がもっと問題であって、たまたまネットでその人格が現れてしまっただけのことだとは気付かれません。

情報の洪水で情報を選ぶことが困難になった反面で、情報の窃盗がいつも簡単に行えるようになりました。学問は悪い言葉で言えば、古い学説のコピー、改変の塊に過ぎないと言えないこともありません。新しいものは古いものからしか生まれえないという名言を待つまでもなく、過去の遺産がなければ新しいものは生まれえないからです。

あまり指摘されることはありませんが、「コピペ」の最大の「犯人」は Google などの検索エンジンです。無断で情報をコピーして、そっくりそのまま転載します。そうとは気付かずには私たちはそれらの情報の「二次利用」を行っているとも言えます。私はかつて無断で自分の書いたものをコピペされたことがあり、検索エンジンによる自

分のホームページのインデックス化を10年以上拒否しています。

ただやはり誰も思いつかないような発想はときに生まれます。流行とは関わらず、「本当のものは何か」「何がものごとの本質か」という視点を忘れないようにしないことが肝要で、皆がそう思うから正しいだろうということではありません。例えば(日本の大学でもそうですが)グローバル化が叫ばれて久しいですが、今世界や少子高齢化で体力が衰えていっている日本で求められているのは正反対のローカライゼーションであると主張することなどがそのような視点の一つです。

冒頭のやりとりに戻っていきましょう。私は今から20年ちょっと前に海外で勉強する機会があり、インターネット黎明期を原体験することができました。「図書館としてのインターネット」(<http://www.lib.kobe-u.ac.jp/kanpo/6-3/6-3-2.html>)にそのときのことを書きましたが、当時はインターネットの使い方そのものが分からず、私が当時から使っていたMacintoshではインターネット接続用のプログラムが有償(今ではOS標準)だという時代で、まして日本語の情報などは海外にすることもあって皆無に近い状態でした。一番困ったのが日本との電子メールのやり取りで、英語のみしか表示されない海外の端末でいかにして日本語のメールのやり取りをやるかが難題でしたが、神戸大学の有志の方(後にお2人とも情報基盤センターのセンター長になりました)の助けでなんとか難題をクリアし、帰国後はKHANの仕事のお手伝いをするようになりました。

情報のほとんどない中、実際に使ったことのある方からの貴重な情報は「ホンモノ」で自分で容易に追体験できました。また上記の拙稿で書いていたように、ネットワークは機械と機械を結びつけるためにあるのではなく、人と人とを結びつけるためにあるのだということとその後の20年の体験の中で実感してきました。一番の実感はインターネットだけではなく、世の中にあるすべての仕事、すべての人間がなんらかの契機ですべて結ばれており(吉野源三郎の「君たちはどう生きるか」の中に同じような表現があります。是非見つけてください。)、それらの関係の中でひとは生かされていることでした。神戸大学のネットワーク環境もそれを整備してくれる人たちの献身的な努力によって支えられています。水や空気のような存在にいまやネットワークはなっていますが、ひとたび不調になると途端に困ってしまいます。

情報の洪水の中、どれがホンモノで、どれがニセモノかを見分ける必要が高まっています。本当の答えは検索した画面上には出でず、自らや仲間たちと協力して出てくるのでしょう。20年前に震災で授業ができず落ち込んでいた私にネットを使った授業は救いの手を差し伸べてくれました。これからもホンモノを探す同伴の友として利用することになるでしょう。

ホンモノの探し方を書くのではなかったの?とここまで読んで思われた方も多いでしょう。ホンモノって何ですか?ニセモノとは? それを考えるのが我々大学人に課された永遠の課題でしょう。

最後になりましたが、本稿を書くきっかけを与えていただいたYUさん、SKさん、留学中にお世話になったKEさん、MKさん、この原稿に目を通していただいて有益なコメントをいただいたYKさん、そしてKHANを支えている皆さまにこの場を借りてお礼を申し上げます。